

Letting Students Ask and Answer Their Own Questions : A Look at Two Types of Inquiry-based Learning for Teaching Literature

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): Inquiry-based Learning, Problem-based Learning, Teaching Literature, History of American Literature, Comparative Literature 作成者: 米塚, 真治 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6332 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学生の質問をベースにした「文学」授業運営の実践

——教師が答える・学生が答える——

米 塚 真 治

序論

本稿は、筆者が行った講義と演習の事例分析を通して、「文学」の授業における inquiry-based learning の有効性を、おもに受講者の関心の喚起と予備知識の活用という観点から検討することを目的としている。

筆者が勤務しているのは東京都下にある私立女子大学の一学部である。「比較文化」という方法論を標榜する学際的な学部で、教員団には人文・社会科学のさまざまな分野の研究者が集まっている。

学生は、入学当初の志望としては、大半がいわゆるエアラインと観光業界を志望して入ってくる。ほぼ全員が外国文化に関心を持ち、次いで外国語学習に熱意を示している（学部が提供する第二外国語のプログラムもそれなりに充実している）。

外国文学（小説・詩・芝居）に日常的に関心を持っている学生は多くない。映画や音楽はもちろん、美術と比べても少ない印象である。文学を専門とする教員も、二十年前の設立当初はかなりいたようだが、今は数えるほどになっている。

一学年の人数は180名ほどで、筆者がおもに教えている「アメリカ文化コース」には、そのうち45名ほどが在籍している。

そのような職場で、筆者はゼミ以外の専門科目として、アメリカの文学・芸術の講義と、アメリカ文学の演習を担当している。受講者数は、必修科目である前者が45人強、選択科目である後者が30人ほどである。

筆者が両科目を担当するようになったのは二年前、2014年度からである。「文学」という言葉に「権威」のようなものを感じて反発することもないけれども、憧れも特になく、ふだん詩や小説に親しんでもいない、そのような受講者との間でどのような関心や問題意識を喚起していけるか、日々試行を重ねている。

「講義」は、P・ティモシー・アーヴィン著『アメリカとアメリカ文学史』（1993年、南雲堂刊）を教科書として指定している。社会史のうえに「キャンノン」を位置づけるような内容の教科書である。筆者が行っている講義は、個々の作家・作品へのアプローチは新しい研究動向に基づくけれども、扱う作家の顔ぶれ自体は伝統的なもの（教科書に登場する作家+α）である。換言すれば、「読まれ方の変化」や「以前より読まれなくなった理由」も見せようとしている、と言えようか。他に、作家たちと同時代の社会思想や大衆小説な

どへの言及も頻繁に行っている。

「演習」では短編小説の原書講読を行っており、2015年度前期にはユダヤ系アメリカ人作家バーナード・マラマッドの単行本未収録短編集（南雲堂刊）、後期には日系アメリカ人作家たちによる短編集（鶴見書店刊）から四、五編ずつ選んで講読している。

本稿は二部から構成されている。

「教師が答える」と題した第1章は、「講義」の2015年度後期中間テストで受講者たちが書いた「教師への質問」と、筆者が書き込んだ「回答」の組み合わせの抜粋から、おもに成っている。中間テスト全体の形式は、選択式の設問二部（引用を示して出典を特定させる部分と、通常の選択式問題）と、記述式の設問二部（提示したテーマから二つを選び論述する部分と、質問部分）から成っており、「教師への質問」はその最後の部分にあたる。当該の設問は「9章から12章の範囲で、質問を一つ記しなさい」とし、「いい質問と認められる度合いに応じて加点する」と明記した。形式は事前に予告しており、「学問的な問題提起」でもよいが、基本的には「教師に聞きたいこと」を聞いてかまわない、と授業中に伝えてあった。

「学生が答える」と題した第2章は、「演習」の課題として、短編一編を読了するごとに受講者から質問を集め、その中から受講者自身が選んで回答したものだ。この第2章の実践は第54回アメリカ文学会全国大会（2015年10月11日、京都大学）で行われたマイケル・プロンコ氏（明治学院大学）のワークショップ報告に触発されている。

1章「教師が答える」

(1) 方法とその理由

「教師への質問と回答」を行うきっかけとなったのは、関東地方のある大学教員（おそらく体育学専攻）が匿名で開設している教育論のブログである。この主題に関連する一連のポストで著者は「問題解決型学習」の問題点を指摘している。この型の学習では、「解決」に効率的に取り組むことが前提とされ、当該の問題自体の適切性を問うことはなおざりにされがちである、というのである。¹ 代わりに著者は、良質な「問題を見つける力」を得させるために、毎回の講義で「教師への質問」を一言で書かせ、教師がそれに答えることを実践しているという。これによって、マイケル・サンデルのような対話式授業を、質問・回答用紙の配付という形で具現化してもいるのだという。²

よく行われている授業後の「レスポンスペーパー」のコメントでは、学生たちの中であらかじめフォーマット化されている感想が、半ば自動的に記入されるだけ、と著者は指摘するが、筆者も基本的に同意する。筆者も、コメントよりも「問い」を書いてもらうことを、以前から行っていた。授業評価アンケートの際、「質問によって学生の意見を引き出し…」

という項目の数値がいつも低いため、「質問票の徴収とそれに対する回答」という形で擬似的に実現しようとしていたのである。教育方法としては inquiry-based learning (IBL)³の部分的導入、ということになる。

前掲ブログの著者風に言えば「遠慮深い学生たち」⁴は、促しても授業中に質問をめぐらさない。「目立つ」勇気が要る大人数の授業だけでなく、少人数の授業でもそうである。筆者が以前に勤務していた職場で設けられていた語学の習熟度別クラスでは、下位クラスほど、質問やリクエストが出にくかった。それらのクラスの理解度は低いから、教師の「察し」がよほど良くなければ、結果として悪循環に陥っていく。これは、授業どころでない深刻な問題を抱えた学生が下位（とくに最下位）クラスに集中するという事情もあるのだが、それだけでなく、質問をすると教師に「わかっていない」と思われて内申点が下がる経験を、彼らが中高時代に（客観的、あるいは主観的に）してきたからではないか、と個人的に疑っている（確認は取れていない）。

前職・現職のこのような学生たちに「良質な少数意見と問いの形成こそが、学問の本義である」と訴え、レスポンスペーパーやテストで「学問的に有効な問い」を求めてきたのだが、有効な問いはなかなか出なかったし、何より白紙・空欄が目立った。

そこでこのブログを読んで気づいたのが、「学問的に有効な問い」を「問題提起」という形で求めるのは、学生にはハードルが高すぎた。別の言い方をすれば、それでは受講者にとっては「査定」の機会しか予想できなかったのではないかということだ。

ひとくくりに inquiry-based learning といっても、問題を教師があらかじめ提示する段階と、学生が探して提示する段階とに分かれるし、後者の中でも「問題提起」と「教師への質問」では意味合いが異なる。「教師への質問」という形を筆者が避けていたのは、授業中に質問が出てこなかったことに加え、教師が「正答を与える権威」としてふるまいたくない、そもそも「正答」という認識を持たせたくないという大義があった⁵。他方で、批判を避けたいという動機もあったことも否めない（授業内容への質問を募ったにもかかわらず、「全然わからない」「難しすぎる」はともかくとして、科目やカリキュラム構成、人格などに関わる一方的な批判が寄せられることが過去にはあった）。

しかし、そのようなリスクがあるにしても、「教師への質問」への回答が得られることで学生は、「査定」だけでなく個人的「承認」の機会を得られるのではないか。さらに、「いい質問」を教師が授業で匿名のまま公開することによって⁶、「承認」獲得の手応えは深まるのではないかと考えを改めたのである。この試行が成功したかどうかは、のちに列挙する質問と回答から判断いただきたい。

(2) 質問の評価理由

「高得点をもらえる質問」として、前掲ブログの著者は次のように述べている。

チョッと考えりゃわかること、そもそも無知によるもの、本人は知りたくてしょうがないのかもしれないが価値の低いものは低得点です。

高得点の質問というのは、回答者である私ならではの回答が引き出せているもの、明確に正解がないものです。

つまり、「本当に問題なこと」を質問できている質問を高得点にしています。

レポート課題とか論文のテーマになりそうな質問という事もできるでしょうか。⁷

そして別のポストで、具体例を挙げている。

点数が高い学生の質問は、例えば以下の様なものです。

Q1:「脂肪燃焼」というが、なぜそのような表現がされるのでしょうか？本当に燃えているわけじゃないですよね。

A1: たしかに面白いですね。たぶんですけど、脂肪(油)がランプに用いられていたから、そういう比喩でしょうか。なお、公的な研究発表等では「脂肪酸化量」や「脂肪利用量」などと表記されます。

(中略)

対して、点数が低い質問はこういうのです。

Q1: 初心者向けやオススメのトレーニング、運動方法はありますか？

A1: その人がどのような人なのかによりますので、一概には言えません。

Q2: 「体育」「スポーツ」「運動」の違いを教えてください

A2: 授業でやりました。聞いてませんでしたか？⁸

受講者全員の質問に回答するにあたってブログを見直したりはしていないのだが、結果として筆者の評価も、上記と類似した基準によることになったようである。ただし「点数が低い質問」(「聞いてませんでしたか?」の類いがたくさんあった)は、本人に回答するにとどめ、「よくない質問」の例として公開するようなことはしなかった。以下に列举するものはすべて、筆者がそれぞれの意味において「いい質問」と評価し、授業で公開したものである。

質問と回答はおおよそ年代順に並べてみた。受講者の質問には、誤字以外の修正は加えていない(サンプルやデータとしての正確性を重んじたからではない。教室で学ぶ一人一人が人格だからである)。筆者の回答も基本的に受講者に返却した答案のとおりだが、教室で映写・紹介する際に補足した内容を一部加えたところがある。質問・回答の後に付けた*は、本稿への掲載にあたって筆者が加えたコメントで、質問の評価理由などを記してある。

(3) 質問と回答

Q. エミリー・ディキンソンは近所や友人へのお裾分けに詩を送って[ママ]いたけれど、どのような内容のものを贈っていて、それは彼女が普段書きためていた後に出版されたものと同じようなものだったのでしょうか？ 出版を考えて書いたものとお裾分けで書いたものに違いはあるのか？

A. 残念ながら残っていないのでわかりません。近所の人にとってディキンソンは庭とパン（と、ひきこもりの奇行）で知られており、花やパンに付いてきた詩のほうは価値のないものだったのです。

Q. 私が一つ思ったことは、9章のエミリー・ディキンソンの写真です。2枚の写真のうち、恋人と写っているものがありますが、彼女とエミリー・ディキンソンのその二人でとった写真が残っていて、他の成長過程の写真がないのだろうかと疑問に思いました。

A. 子供時代の「肖像画」はあります(ダゲレオタイプつまり銀板写真の発明前ですからね)。大人になってからは、マウント・ホリオーク入学後の一枚と、近年発見されたこの一枚しか、写真は見つかっていません。

昔はどんなときに写真を撮ってもらって残したか。それを考えると、二人で撮った写真の重要性がわかるでしょう。(ウォルト・ホイットマンが恋人の男性と向き合っ撮った、あの写真を思い出しますね)

Q. エミリー・ディキンソンについて考察するうちに、より興味が湧くようになってきたのであるが、彼女は25歳～32歳の間、高名な牧師と文通をしていた。これは彼女の一方的な恋心で、牧師の赴任によって幕を閉じ、エミリーは心に深い傷を負った。しかしながら現存する肖像には恋人と予想される女性がエミリーのかたわらに描かれている。この肖像でエミリーは年齢30とされているが、牧師に恋していた時期とのタイムラグはどういったものなのだろうか。私が思うに、エミリーはバイセクシャルで、牧師に恋心を抱きつつ、この恋人（エミリーの兄の妻）にも興味を示していたのではないだろうか。

A. 基本的に人と会うのを避ける人なので、難しいのですが、残っている手紙や証言等から判断して、両性にロマンティックな感情を抱いたようです。男性は常に目上の尊敬できる人物で、プラトニック・ラブを超えることはない。女性はそれと異なり、かなり「S[サディスティック]」な性格だった兄の妻（配付プリントの写真の女性は、彼女とはまた別の人です。訂正します）とは、喧嘩の絶えない、もっとリアルな関係でした（肉体関係の有無はともかくとして）。他にも（写真の女性のように）、いた可能性も指摘されています。

*ディキンソンに興味を持つ受講者が多かった。マーク・トウェインと同等か、それ以上。論述問題でも、テーマを二種類用意したトウェインよりも、一種類のディキンソンのほう

が選択者は多かった。単に試験範囲の最初だったから、というだけではあるまい。紹介した作品自体の力もあるはずだが、人物とくにセクシュアリティへの関心も高い。学部生の卒論テーマを見る限り、LGBTは、移民やエスニック・マイノリティに次いで、かなりの関心を集めているようだ。

筆者の講義についていえば、教科書の記述およびかつての通説を、最近の研究書にもとづいて修正していく方法が、ここでは煩雑かつ中途半端となり、誤りや学生の誤解も生んだようである。

Q. エミリー・ディキンソンの詩は生前に一度出版の話が挙がるも見送られ、死後四年で初の出版がなされるということを知り、私はまるで画家のゴッホのようだと思った。そこで考えたのは、その時折の思想や社会的な傾向によって文学の評価も異なるのかということである。

A. ディキンソンと比べればゴッホは全然世に出ていると思います。

最後の点については、ロシア・フォルマリズム以降はそのように、美学の変化と社会の変化、支配的なジャンルの交代を結びつける考え方が当然とされています。

むしろ問うべきは、継続して高い評価を受け続ける「古典」（その集合がキャンオン）はどのようにして可能なのか？ その中で、生前すでに評価されていた作家と、死後に（再）発見された作家の割合は？といったことではないでしょうか。

*このQ&Aは、公表候補に入れていたのだが、直前に、受講者には実感が持てないだろうと判断して断念したもの。

キャンオンを形成し維持する政治性や権力関係を、批判するか。それとも、時代や国の文脈を超え多様に読まれる「古典」作品の力を、肯定的に評価するか。古典作品が現代の作家をいかに触発するか、あるいは逆に、前期の講義でエマーソンがシェイクスピアの影響を引き合いに出して論じていたように、いかに「抑圧」しうるか（『アメリカの学者』）。「ソフトパワー」への関心を表明する学生が複数出てきていることも考えれば、より関連性のある具体的な「問い」を用意して、問うてみればよかったと惜しまれる。

Q. マーク・トウェインとウォルト・ディズニーと関係[ママ]について教えてください。ディズニーランドには、トムソーヤ島やマーク・トウェイン号 [ママ] やスプラッシュ・マウンテンなど大きくの [ママ] マーク・トウェインに関係性のもの [ママ] が残っているの、とても気に入りました。

A. スプラッシュ・マウンテンはトウェインではありません。

ディズニーはトウェインの作品、特に『トム・ソーヤの冒険』の愛読者だったと言われています。特に家出をして、大人の課すルールから離れた体験をする箇所が気に入って

いたと言います。それゆえ、オリジナルのディズニーランド開設にあたってディズニー自身がデザインとコンセプト設計に最も深く関わったのがトムソーヤ島であったと言われるのは、驚くべきことではありません。

入って左手、建国神話（西部開拓史）をテーマにした「フロンティアランド」のなかに、ミシシッピ川を運行していた蒸気船を半世紀ぶりに復元させ（正確に言えば、石炭でなく石油で蒸気を起こす蒸気船なのですが）、その船に「マークトウェイン号」と名付けさせたこと。そして同名・異名の蒸気船が東京をはじめ他のパークでも運行していることも、不思議ではありません。ディズニーとミッキーマウスの出世作となった『蒸気船ウィリー』（1928）も観てみましょう。

*ディズニーは本来、文化研究への好個の入口となりうる。だが、映画のテクノロジーからフロンティア、フォーディズム、保守主義、文化産業、ショッピングモール、ゲイティッド・コミュニティまで多岐にわたる関連テーマを、独立した講義にまとめる準備は、筆者にはまだできていない。

Q. マーク・トウェインは、開拓者一家であり、インディアンや黒人たちの民話を聞いて育ったとあったが、当時、インディアンや黒人と白人では、別の場所で生活していたというイメージがありました。どのような機会に他の人種同士、会話をしていたのでしょうか？

A. 黒人は使用人であった（南部では女性のみが家内の使用人、中西部は両性）ことは、授業でお話ししました。インディアンは、しばしば取引に訪れていました。（酒や、彼らには免疫のない致死性の病気、部族抗争に使う武器なども持ち帰ることになります）

ついでに入植者だけでなく、マウンテンマンという存在についても、よかったら調べてみてください。白人で、ビーバー帽の材料となる毛皮猟やインディアンとの交易にあたり、インディアンの妻をめとることも多かった。私が敬愛するアニー・ブルーというアメリカ人作家が来年出版する予定の大長編の、一人目の主人公も、マウンテンマンです。

*再確認による定着と発展学習。ついでに、ちょっとした告知（邦訳出版はやや望み薄だけれど）。

Q. 『トム・ソーヤの冒険』では、解放感を描いた裏に現実感が存在すると記されているが、自由がもたらす恐怖について、具体的に教えてほしいです。自分の良心に従うことが恐怖になるのか。

A. 最後の点は誤解で、配付プリントにそう記してあるのは『ハックルベリー・フィンの冒険』です。

ご質問の箇所は、予定していた説明を端折った部分ですが、インジャン・ジョー一味の

犯罪、仲間割れ、殺人などを墓場で目撃し、さらには追跡されるようになる箇所を指します。自分の力で生きていくということは、そういう現実に関与することを意味します。(また、先住民の血を引くインジャン・ジョーらも「自由」なアウトローであるが、幸福には結びつかない、という要素もあります)

*質問が見つからないとき、本発表で時間の都合上端折ったことを、そこで補足してもらおう、というのは学会でよく見る光景だ。そんな知恵も、この際に覚えてもらおうと。

Q. マーク・トウェインは、なぜペンネームで活動をしていたのか。

A. 憧れの職業であったpilot (水先案内人) という出自への誇り、という推測は授業でお話ししました。「警戒水深」というペンネームの「意味」ならもう一つあり、それは新聞に虚報を書いていた当時に、浅瀬だよ→「浅い」話だよ→ウソだから、真に受けて座礁するだよ、という標示として機能していました。

*「聞いてませんでしたか？」の類いの質問なのだが、上と同じ目的で利用できるので公開。

Q. マーク・トウェインはなぜ政府やメディアを批判するだけであり、自分が政府やメディアの立場になり変えようとしなかったのか。

A. 政府：自分が官僚や政治家にならなければ何も変えられない国(残念ながら、いま我々の目の前にあるのはそのような国ですが)は、民主主義ではありません。

メディア：彼自身が有名作家・出版業者として「有力メディア」の一つであり、その資格で他の有力メディアを批判していたのです。どこかを一つを握ればメディア全体が動かせるというのは、これもまた民主主義ではないわけです。(残念ながら…以下同じ)

上の問いは、「専門家・当事者以外は言う資格なし」という脅しに、ややもすると転換しがちなので、そこは注意してもらいたい。大事なものは、それぞれが自分のできることをすることです。

*時局・現実を強烈に意識して問題設定するが、主張を直接押しつけることはない。一見隔たって見えるものの研究を通して、伝える。読者・聞き手にフリーハンドを与える。それが人文学だと、筆者は思っている。

が、出た質問に対する回答という形であれば、主張をストレートに伝えることも可能だ。質問・回答は、そのように利用することもできる。

Q. マーク・トウェインについて、いくら表向きが児童文学であっても、よく読むと内容がブラックであったりするのに、当時それが問題になることはなかったのでしょうか。

『ハックルベリー・フィンの冒険』は名家の殺し合いなど、うるさい親は文句を付けてきそうだと感じましたが、そういうことはなかったのか気になりました。

A. まず、妻の「検閲」を通る必要がありました。また、地域有力者夫人などによる各地の図書委員会が、図書館に入れないなどの裁定を行うことはよくありました。同様に、学校で扱わせない決定もよくありました。これは発行当時から現在まで続いており、『ハックルベリー・フィンの冒険』は米国史上最も頻繁に禁止された本と言ってよいでしょう。

しかし、その禁止理由は、時代と共に変わっています。そこをフォローすると、見えてくるものがあるでしょう。

Q. 10章のプリントに児童労働についての写真があります。他の授業で児童労働について学びました。彼らは何を楽しみに生きていたのでしょうか？

A. この授業は児童労働をメインに扱っていませんから、彼ら（時代や地域は全く特定なさっていませんね）の楽しみ全般について答えることはできません。

この授業の範囲で言えば、タイム・ノヴェルのうち、少年たちによく読まれたジャンルに、貧しい少年が勤勉・儉約そして幸運によって立身出世を果たす物語のジャンルがあり、代表的な作者にHoratio Alger（アルジャー、1832-99）がいます。

*他の科目と関連させて論じるのは、趣旨としては良いことのはずなのだが、経験上は、当該科目を聞いていない／ちゃんと出ていない学生が苦し紛れに書いた答案に多い。ここではタイム・ノヴェルの補足説明の機会として公開した。

Q. 黒人が解放されたが、彼らは学ぶことも出来なくて、文字や言葉も上手く話せない人が多かったと思うが、どう生活していったのか。

A. たしかに連れてきた当時は反乱を防ぐために、母語の異なる部族同士を混ぜていたし、同じ理由で、ずっと教育も受けさせなかった。が、この時期には、ガラ語（アフリカ諸言語と英語の混成語）を話していた地域（サウスカロライナ州・ジョージア州の沿岸部と沖合の島）以外では、英語の発話そのものに不自由はなかった。

解放後、直ちに行われたことの 하나가、黒人たちによる初等教育学校の設立でした。職業教育を中心とした中等・高等教育も、黒人解放運動の次の課題となる（→ブッカー・T・ワシントン）。そうやって設立された黒人高等教育機関から、17章で扱う黒人作家たちも輩出します。

*のちの章の予告として公開した。

Q. ジョーエル・チャンドラー・ハリス『ウサギどんキツネどん』という作品で、これは

ディズニーランドのアトラクションの一つともされる作品ですが、この作品の中で動物が人間のように行動しているように書かれている点が独特の特徴を持っていると私は思いました。このように動物が人のように行動・描かれている作品というのはアメリカ文学において多く存在する作品ですか。私はディズニー作品をみているとこのような作品を多く目にしますが、多くのものがファンタジー世界の中に存在するものが多いので、人間社会の中にもこのように描かれる作品があるのかについても同時に教えていただきたいです。

A. (最後の二行の意味が判然としないので、正鵠を失した返答になるかもしれませんが、その節はご容赦ください。)

fable (寓話) が動物寓話であることは、授業でお話ししました。ヨーロッパにはギリシャのイソップ寓話を源流として、中世にはbestiariesの伝統がありました。bestはbeast (獣) という意味です。動物ごとに各種の美徳なり悪徳なりの象徴的な性格を割り振り、それらの絵入りで、キリスト教道徳を語るものでした (聖書の現地語訳は禁じられていましたし、読み書きができない人も多かったので、説教の他に、教会のステンドグラスや聖書劇やこういった方法で、教を説いていたのですね)。その流れの上に、動物を主人公とした民話、童話が生まれました。特に20世紀前半のイギリスでいくつもの名作が生まれ (なぜ集中したのだろうか?)、ディズニーの長編映画は直接このイギリス、ヨーロッパの系譜に接続しています。

アメリカ文学で、「人間が動物と交流あるいは敵対する」様子を描く作品は数多く存在しますが、「動物たちを主人公として、実は人間世界のことを語る」体の作品は、15章で紹介するジャック・ロンドンの二作以外にはぱっと思いつきません (他にE・B・ホワイト『シャーロットのおくりもの』『スチュアート・リトル』、ル＝グウィン「空飛び猫」シリーズとか)。少ないのは確かです。

*他のコース生から「ディズニー●●」と揶揄されることさえある、当コースの学生たちであるが、この質問はディズニーと児童文学とをつなぎ、さらには質問者も期せずして、ヨーロッパとアメリカとの比較にもつながっていく。前掲ブログ著者のいう「論文のテーマ」になり得る質問。

Q. なぜジョーエル・チャンドラー・ハリスは白人でありながら黒人の民話を広めようと思ったのか? 白人の黒人の差別がはっきりとあった時代で、なぜ黒人の肩をもったのか。他の白人から差別される、また、読まれないであろうということを考えなかったのかが気になりました。

A. 授業でお話ししたように、新聞連載中からたいへんよく読まれました。

差別と、黒人の文化を娯楽の対象とすることは、両立します。先立つ19世紀半ばには、 minstrel show といって、黒塗りの白人が黒人音楽を演奏し、人種ステレオタイ

プな筋の芝居をするのが流行していました。現在の黒人音楽および黒人にルーツを持つ音楽の受容を考えても、それはわかるでしょう。

*回答では、「差別の娯楽化」という今日的課題とも通底する、大事なことを伝えた。ただし、質問に正面から答えていないため、ハリスのプランテーション体験や、白人貧困層と黒人との連帯可能性という肝腎な話題を紹介しそこねている。物語内の「ウサギ=黒人」による「キツネ=白人」への復讐や警告が、黒人・白人双方の読者にどうやって受容されたかにも触れていない。なので、せつかくの質問への回答としては不十分だったといえる。リンチが、黒人に協力する白人に対して最初になされたことにも、ついでに触れておくべきであった。

Q. 小説家、詩人、ジャーナリストと多くの人が、黒人と白人の差異やくらし、文化などを物語や詩にしているようだが、その他の民族、例えばアジア人や原住民（原住民は多少出てくるが）は、白人黒人たちにどう関わっていたのだろうか。物語の中では全くといっていいほど彼らは出てこない。彼らが「アメリカ人」として認められていなかったから出てこないのだろうか。それとも商売的に彼らを登場させると、バッシングされてしまうからだろうか。

A. 「原住民」は差別的なニュアンスになるので、「先」がいいでしょうね（10年、20年先になると、また用語が変わっているでしょうが……差別が実体として残る限り）。

アジア人についていえば、まだ出てこないのは、まだアメリカに来ていなかったからです。この時代に、中国人「苦力」を使役して大陸横断鉄道の建設が始まったばかりですから。とはいえ、やってきた後のアジア系、黒人、先住民、それぞれの描かれ方の違いは、興味深いところです。

さらに、「直接描かれなくても（白人だけが描かれているように見えても）、黒人の存在が常に意識されてきた」（トニ・モリスン『白さと想像力』。著者はノーベル文学賞を受賞した黒人女性作家）とか、同じく（つまり先住民が登場しなくても）「白人開拓者の表象は先住民表象を受け継いでいる」（レスリー・フィードラー『消えゆくアメリカ人の帰還』）とか、そこまで広げて考えると、さらに面白いです。「描かれていない」ものを見るのも、面白いんですよ。

*モリスン、フィードラー。ふだんは教室に回覧しても、ものすごい速さで回って帰ってくる「専門書」の類いも、学生自身の質問が発端となれば、興味を持ってもらえそうである（回してみればよかった）。

Q. ウィルバー・ライト、オーヴィル・ライト、自発飛行原理を公開したサントス・デュ

モンは、両者どちらも飛行機が進歩し軍人に起用 [ママ] されたことに反発して、サントスは自害までしてしまったが、元々飛行原理をどのように使用しようと考えていたのでしょうか？進歩するにつれ、また発明したときから、軍人に起用 [ママ] されることは考えられたと思いますが、それでも公開したのには何か大きな理由があったのではないのでしょうか。

A. まっとうな質問だと思います。私も今から調べないと答えられません。せっかくですから、皆さんも一緒に調べてみましょう。

* 「いい質問ですね」という返答が持つひとつの意味、そして、その種の「いい質問」を受け取った際の作法を示してみた。表情も、にっこりしながら返すと良い。

Q. 写実主義から自然主義の作品において多くの女性が登場してきます。『ある貴婦人の肖像』『迷える夫人』『街頭に立つ女』『椿姫』。この女性たちの多くはどちらかといえば不幸な立場ですが、日本でも心中物など文楽、歌舞伎において不幸な女性が出てきます。この両者における女性の扱いは社会的要因（男尊女卑のような思想）があるのでしょうか？

また、一方でディズニーのプリンセスものや宮崎監督のジブリは少女の成長ものであったりします。そこにもまた時代や歴史、社会的な要因があるのでしょうか？

A. 心中物の女性たちは、自分の性愛の相手ではあるけれども社会的地位が十分でない（身請けする資金を持たないなど）男性と心中する点において、抵抗者として描かれていると言えます。作者は男性と女性で異なるけれど、同時代から少し後にアメリカで出てくるフェミニズムの初期作品（ケイト・ショパン『目覚め』など）と共振するように思います。ただし社会階層は異なります。これは私の考えなので、あなたも考えてみてください。

ディズニーのプリンセスが、初期から成長物語の担い手であったと論じるのは、無理があるように思います（若桑みどり『お姫様とジェンダー』を読んでみましょう）。しかし近年においてディズニーでもジブリでも、主人公の性別にかかわらず成長物語を担うようになったことは、確かに変化でしょう。

* 「比較文化」専攻らしい、すばらしい質問だと、力を込めて褒めた。

恣意的に断定された海外との差異や、国内を同一化させる願望にもとづく「日本独自」論が、志願者や入学者のあいだにも幅をきかせはじめている印象を、筆者は持っている。これに抗して、「構築主義 (constructionism)」の立場から、国内にある（あるいは、あった）差異に共時的・通時的に目を向けること。他文化との差異を自明と見なすのではなく、その理由や背景を追究すること。そして、他文化との「共通点」を発見することこそ今は奨励したいと、筆者は考えている。

(4) 方法の評価

「書面で教師に質問し、回答を受け、それらが公開される」方法をとることにより、以下のような利点が見て取れる。

- ・ 不明点を尋ねるにあたって、評価を意識するため、学生は自分なりに理解した範囲を記してから質問する。
- ・ 承認欲求が、学生自身が仮説を立てて教師に確認を取ろうとする動機付けとなる。
- ・ 学生は教師の「本音」を引き出す質問ができ、教師はそれを利用することができる。
- ・ 大人数の授業でも個別対応ができる。特に、授業で想定したターゲットよりも進んだ関心を持つ学生に応えることができ、発展的学習への契機を与えられる。あくまで「教師への質問」という形なので、当該学生から見ると、他の学生から自己顕示ととられるようなりリスク（すなわち敷居）は低いだろう。
- ・ 最後に挙げた質問と回答例が典型だが、「教師が持つ知識総体」への質問ととらえれば、学生は科目の枠を超える質問を発することができ、教師はそれを利用することができる。このような学際的学部にあっては、利用価値が高い。

(第2章に続く)

-
- 1 「『問題解決能力』を高めることの危険性」『Deus ex machina な日々』2015年7月11日 <http://imnstir.blogspot.jp/2015/07/blog-post.html?m=1> 2015年12月5日閲覧。筆者はふだん受講生に、信頼できる機関が開設したサイトや、筆者の身元が明示されたサイトを参照するように指導している。このブログは匿名なので当てはまらないのだが、論証目的でなく着想を得るための利用なので、許容いただきたい。
 - 2 「質問させる」同ブログ、2011年11月12日 http://imnstir.blogspot.jp/2011/11/blog-post_12.html?m=1 2015年12月5日閲覧。A3用紙両面を使用していたというのが、掲載された実例を見る限り、必ずしも全面を埋めていたわけではなさそうだ。また、元々は毎回、全員に回答し公開していたというのが、2015年度は履修者が多く、全員の質問に答えられないため、選抜して回答＝公開しているという。（「コピペ右翼とカンニング左翼」同ブログ、2015年10月30日 http://imnstir.blogspot.jp/2015/10/blog-post_30.html 閲覧日同じ）なお筆者の回答は中間テストに対するものなので、回答は受験者全員に行って返却している。
 - 3 デューイやヴィゴツキーの知見をもとに創始され、1960年代以降、多くの実践例を有している。近年、教育現場への導入に伴って功罪が議論されるようになった構成主義（constructivism）の教育理論において、主要な方法のひとつとみなされている。同じく主要な方法のひとつとされ、ブログの著者が批判している「問題解決型学習」(problem-based learning) とは、微妙な関係にある。初期段階の方法（教師が問いを与える）に共通性があるためだ。

- 4 同上
- 5 inquiry-based learningという教育メソッドもまた、「正答」の獲得ではなく、学生が形成し展開した問題に、自ら仮説を立て、検証し、議論を行って正当化するにいたって初めて完成となるのである。この過程は第2章「学生が答える」で紹介する。
- 6 主として褒めるために公開する場合であっても、筆者の経験では、氏名の公開は受講者の怖れと苦情を招くことが多かった。
- 7 「質問させる」以下同。ただし句読点と括弧の書式を本稿の本文と統一した。
- 8 「井戸端スポーツ会議 part18 『健康運動に関する授業の質問回答集』」同ブログ、2015年4月26日 <http://imnstir.blogspot.jp/2015/04/part-18.html?m=1> 2015年12月5日閲覧。句読点については同様。

Letting Students Ask and Answer Their Own Questions: A Look at Two Types of Inquiry-based Learning for Teaching Literature

Shinji Yonezuka

Abstract

This essay discusses the advantages of using Inquiry-based Learning (IBL) for teaching literature. It examines the effectiveness of the approach in terms of spurring more interest and activating prior knowledge among the students. It also highlights how the new method helps improve the students' self-esteem. Much evidence is presented in favor of combining Inquiry-based Learning with the traditional lecture-based approach in a literature classroom. The issue of commonality and difference between Inquiry-based Learning and Problem-based Learning is also explained.

Keywords: Inquiry-based Learning, Problem-based Learning, Teaching Literature, History of American Literature, Comparative Literature

(IBL、問題解決型学習、文学教育、アメリカ文学史、比較文学)

